

ため池に特有な植物の一種ヌマカゼクサに想う

井 波 一 雄

植物についての関心が、異常なカラー版図鑑の洪水でも知られる今日、水草もまた大きく注目されてきて続々とした報告発表、さらには栽培やら、また有害外来水草として大々的な駆除作戦と、日常の報道もにぎやかである。

シラタマホシクサに代表されるように、注目をされる、しかも見た目に美しいものは、観光資源化されて写真撮影のコンクールの対象とされるなどヒマをもてあます天下太平の御世らしい昨今、いかほどの多くの人が、老壮男女を問わず、昨日はコアラに今日はシラタマ、つい先日はナガバノイシモチソウと西や東へなだれこんで一目一目と流行を追うも、この啓蒙された人の幾パーセントが、真に自然を理解し、自然の愛好の真意を知り、さらに自然なり植物なりの調査研究に己が知の分(ぶん)を捧げて、この学の進展にプラスしようと決意努力されるような心境が啓発教育されるだろうか。

“アラソウ、これシラタマナントカ？フフン”でチョンでも、新聞報道者は仕掛け人の役場吏員と同じく何百か何千人の来訪数のみを高々と掲げて万事万歳。とすれば老若男女の一生でのセレモニーのような尾瀬詣り60万人という数はまさに大盛会の最たるものとして、日本人の自然愛好度はモロ手をあげて評価されてよいであろうか。

要するにシラタマホシクサは「中流生活」のシンボルとしての確認旅行にしかすぎないのではなかろうか。“私も見て来たヨ、そのすばらしいことは！こんど、あなたもお出でになりますこと！そりゃあ美しいのよ”と向う三軒両隣のオバサマ族やオジン族の、他と一歩一秒をさきんじた優越感のひとときの対象でしかなかったとき、野に秘やかな美の歴史を重ねてきたシラタマホシクサには失礼なことではなかろうか。

植物の名のコレクションマニアも多く、シラタマホシクサの名をカメラやメモに集めて一種また一種ふえたことをたのしむだけの「知の収集遊戯」も太平のレジャーである。この種の人種はあの草この木と耳学問を専らにして、有名な草や花にツバをつけて歩く徒が多い点で、実物を収集するマニアに比べれば自然への実害はまずないであろう。

岐阜県のその道の名所「谷汲村」が今秋村条例でギフチョウの採取を禁止したのも、チョウのコレクションマニアがギフチョウ八十八か所集めなどと全国ガイドマップを宝典にただただ各地のそれを集めて悦に入るような風潮に堕したことにとも対処したと考えられるほど、ヒマとカネが、そして長寿が災してチョウに及ぶ図。さきに山梨県が県条例で高山植物の採取と販売を規制したことと同軌同憂。

シラタマホシクサの人気をそねむわけではないが、植物愛好を口にされる士は、珍花美品や人気ものだけでなく、かつ、カラー版図鑑の俗にまどわされることなく、足下の水辺水中湿地のすべてにくまなく眼を注いで、分布地理への寄与に成果を加えるようにしたいものである。これこそ我らアマの分。

そこで、シラタマホシクサブームの裏で目にもされぬ醜草の一、二を紹介して温古知新とする。

その一つはヌマカゼクサがこれ。この名が日本のフロラに入ったのは、1928年（昭和3年）当時の東大にあった本田正次理学士が、*Eragrostis aguatika* と新名で発表されたのがはじまりである。そのときの引用標本は三点、一つは和歌山県で小川由一氏採集のもの、一つは奈良県奈良で三木茂氏採集、今一つは当愛知県名古屋市の東郊であった田代村で、当時内務省地方局にあった佐藤達夫氏採集（1924）のものであった。この三方の顔振れにみるに、いずれも有能な眼をもった方の若い日のドウラン姿が浮かぶ。採集とか発見が、暁天の星のようにごく限られた学問的思考と目的観に支えられた人によってのみ支えられ、すべて標本として専門学者に提供されることが常道であったという豊かな自然に満ちみちて、池も小川も生きいきとしていた時代といつてよい。

多くの池が干天時の貴重な用水であった時代にあつて、尾張のように全県下最高の干天率を示す（農業気候図1952）地域には池が多く公私で維持されていた。前記田代村も多くの池が分布して周辺丘陵からの自然流入の湧水などを貯えてきた。満水時は池辺の草木が水没するほどに増水し、夏秋から冬にかけては水が落されて、浅い池辺の池底は砂泥質で干上ってしまうので、いわゆる一般水草は浮生も沈水生もともに生育はできない。岸辺の植生を構成する一般陸生植物は満水時の高い水位による水没を考えると、この干満はげしい不安定極まりない池辺には侵入し得ない。わずかに水没に耐えるクロミノニシゴリ、イソノキ、ズミなどが、ヌマトラノオ、ミソハギなどと水陸両用の生活を展開する。

この水生植物からも陸生植物からも、その不安定さのゆえに見放されたような不毛の池畔の秋季のひとつときに勢をのほす一群は、なにか南の浜に特異なマングローブの生態を想うほど巧みな世界でもある。

ヌマカゼクサがはじめて、慧眼の士によって採集された名古屋の田代はその東を占める現、長久手とともに地名からも湿原湿地が連想されるため池の多い、そして大きな用水河川に恵まれない地帯である。

お盆のように広くて浅い人工ため池は干上った池底を池の中心部近くまで広く裸出してしまうこと前述のとおりで、ヨシ、ガマさらにハンノキ林やヤナギの進出侵入を阻止する秋冬の乾原が、春の降雨季までつづく。

ここに、見事に出現する群落がヌマカゼクサのそれである。池のお盆形のヘリを一定の幅でグルリと環状または斑状に散生または群生する。ときには、すぐ池辺にヌマガヤ群落があれば、その前縁に出現する。辺にヨシ原が定着していれば、その中には入らない。池に流入する小流でもあれば、そこにはさらに水湿を要求するグループや一年生また外来種などが優占するために、ヌマカゼクサは寄りつけないで、生えない。

乾と湿とのごく狭い環境と、秋の定期的な減水による池底の裸出陽地という条件にうまく適した生態は見事というほかはない。

路傍のカゼクサが丈高く池辺の草地に大群をつくるのに比べ、ヌマカゼクサは穂を立てないで、地に伏したまま平開して、人の目に全く目立たず、踏圧にも全く被害なく、その根は極めて強じんで土中であつて、少々の土砂の流亡にも耐える性とみる。

ヌマカゼクサとは名づけて妙。カゼクサすら農道の整備や農作業形態の変動によって、その名の

由来伝承とともに生育の場を失うとき、ヌマカゼクサもまた、ため池の埋立や有効効率的な利用とかコンクリート護岸などによる池畔の変質によっても姿を消す今日、この愛知県尾張の東部丘陵地に限る郷土の特殊生態植物を見る眼を持った有能の士による生態調査、分布地理的研究の進展を望みたい。

筆者自身は、古く昭和十年頃から現東山公園の区域内外の池畔に生育するヌマカゼクサを認め、さらに周辺三河部西部、岐阜県、三重県などのそれを確認したいと念じながらも尾張におけるようには確たる標本に接しない。もっとも岐阜県では古く塩田健蔵氏という同県に先駆的な業績を残された方の採集が「土岐郡下」に記されているから、信用のおける資料とはいえるので、その現況実態の報告を期待したい。

先年、三河の豊田市郊外でヌマカゼクサの報告を知ったので、採集者に現地を案内してもらったが、ヌマガヤ草原の中でコレと同定されたという実物はヌマガヤそのもので、全く同定誤りであり報告は取消さるべき誤報と指摘した。また知多半島の武豊町内の湿原で同じ同定者がヌマカゼクサと同定したという現物も現地にみればヌマガヤそのものであって、全くの誤りと知る。かつて豊橋の郊外に本種新見と報じられたが、現地現物を検し得ないながら、前記二例にある誤りと同じとみてよいであろう。ヌマカゼクサを正しく同定する能が第一で、この能はすべてがそうであるように機械的また数値的またはややもすれば売名的魂胆などでは培われない年季と慎重さが要求される。

前述した例のように、一たび発表されるとその同定の否定を現地現物に当ることは極めて多くの徒労がつきまとうもので、後世どころか現世同学の徒を迷わすことが大きいので、自身同定には憶病にならざるを得ない。

なお、同じため池の多い広島県平地のそれも分布生育の可能性は大きい、土井美夫先生の労作「広島県植物目録1983」にも出ていない。筆者自身も十年来同県の植物調査に足繁く通って、その成果の一端を発表してきたが（広島県植物図選全五巻のうち3巻まで既刊）つぎつぎと同県未記録種を新見する眼を全県下に注ぎながら、可能性ある池畔にもまだ目にしていない。

つぎにウキシバについて。

本種もその生態、生育環境は前者ヌマカゼクサとよく似た種である。

水のひいた池畔の裸地や低い草間に長くつるをのぼして、茎頂に目立たぬ緑穂を出す。（大滝末男氏の日本水生植物図鑑1980にあるウキシバの図版は何ものであるか判別もできぬがウキシバでないことは確実——花は芒が長く記載されていながら、図には全く芒がないし、イネ科に大切な葉舌の図もない）

明治26年10月29日、牧野富太郎青年は今では名古屋市に編入の田代村で一珍草を採集して、小塩五郎という篤学の野人からウキシバという名をはじめて教示された、と晩年でも想い出されていた。スブタとかウンヌケとか当時の尾張本草学派の同人が呼称していた名がそのまま、今に標準和名として通用してきた一例といってよい。

筆者は戦後の自然が最も生きていた廃虚の時代に、その田代の一角の小さな池にウキシバが浮いている実態をみる事ができた。ヒシモドキやノタヌキモがその田代地区にあった戦後のしばらく昭和30年までの間であった。

その後の国土改造と経済優先の国是の下でウキシバの浮く時代は消えて久しい昨今、もはやこんな草は目にできないと思いながら、秋ごとに晴天の一日また一日と長靴で探る池畔の植物調査の眼に、ウキシバの大小の群生が名古屋の東郊になお健在することはヌマカゼクサとの再会とともに、この道の感動をあらたにする。

とともに、尾張本草学同人の最後の巨星であった小堀五郎という野人の名を求めぬ、奇人ふりと牧野碩学も敬服した学識に加えて、動植物画の巧みな遺品や事跡を、今国立国会図書館に実証できることは、昆虫学史家長谷川仁氏や地元名古屋の医史本草学史唯一の大家吉川芳秋氏の記にくわしく知ることができる。筆者もまた小堀五郎描くライチョウの図に伊藤圭介賛辞の一幅を蔵する。

干上った池の泥上に限って発生生育する異態のコケにナリタゴケがあって、明治の時代にこんなミリ単位のカビのようなコケに注目発見したのは、名古屋にあった成田清一という篤学の士の眼であった。

ヌマカゼクサもウキシバも、ナリタゴケもため池の多い名古屋近郊の干上った底の浅い池畔のひとときの秋に咲く短い生命のいとなみでありながら、運よくもすべて名古屋で目にされ記録され、日本のフロラへ寄与されたことを誇りたい。

それは冒頭に記したシラタマホシクサー遍倒の宣伝公害におどられる一過性のモノ知りではない、深い自然史への憧憬と傾倒をこそ植物を口にする老若男女に期待したい。

指標昆虫を考える会

昨今、環境保全、自然保護が社会的に重要な問題として論議され施策が講ぜられているが、これと関連し、環境の変化や自然度を生物を用いて表す指標動物という考えが広まってきた。

現在、河川の底生動物を用いた水質判定や植物社会学的手法での環境評価が実用に共されているが、陸棲の昆虫については検討が不十分で混沌たる有様である。この様な状況下で指標昆虫について今一度考える要ありの意見が各地から起っているが具体的な動きが見られるに到っていない。

そこで、東海地方では山下善平三重大名誉教授、佐藤正孝名古屋女子大教授が提唱者となり、1986年6月8日、名女大天白学舎において、「指標昆虫を考える会」と銘打って第1回の会合が持たれた。続いて9月14日、同所で第2回目が開催され、いずれも50名に達する参加者があり、本会の近藤、杉山、村上、相地、安藤、高崎らも参加した。

第1回会合では、チョウ、トンボとセミ、直翅類が各々指標昆虫として有望であること、現行システムの水生昆虫の指標性に問題があること等が、第2回では、アカトンボ類、オサムシ・シデムシ等地表性甲虫類、森林に棲むイトトンボ類を用いての環境調査を行った結果と指標的価値等について各々発表された。2回の会合で個々の昆虫を見た場合どの種も環境指標種となる可能性はあるが、その選択と利用に当っては確固たる生物学的根拠が前提となることが強調された。

陸棲の昆虫のみならず、止水の昆虫の指標性についても論議されており、本会会員にとっても有意義と思われるので是非一度出席されたい。現在は会費は徴収せず会合時の昼食代のみで誰でも自由に参加できる（高崎）。

連絡先；〒468 名古屋市天白区高宮町 1302 名古屋女子大学天白学舎生物学研究室
佐藤正孝